聖　書：使徒 15：1〜21
説教題：主イエスの恵みによって
日　時：2014 年 2 月 23 日

第一回世界伝道旅行を終えて帰って来たパウロとバルナバについて「彼らはかなり長い期間を弟子たちとともに過ごした。」と 14 章 28 節にありました。アンテオケ教会は神の恵みを賛美しつつ、平和の内に過ごしていたことでしょう。ところがその平和が破られてしまいます。1 節：「さて、ある人々がユダヤから下って来て、兄弟たちに、『モーセの慣習に従って割礼を受けなければ、あなたがたは救われない。』と教えていた。」この結果、パウロやバルナバと彼らとの間に激しい対立と論争が生じます。

アンテオケのクリスチャンたちは、イエス・キリストを信じるだけで救われるとのメッセージを聞いて信仰に入りました。彼らの多くは異邦人であり、信仰に入る際に割礼を受けたり、ユダヤ人の儀式律法を守るようにとは言われませんでした。しかしユダヤからやって来た人々が、それでは不十分！と主張したのです。救われるためには割礼を受けることが必要だ！と。このためアンテオケでは大変な混乱が生じることとなったのです。

このもう少し詳しい状況がガラテヤ人への手紙の 2 章 11 節以降を参照すると分かります。このユダヤからの人々がアンテオケに来た時、ペテロはアンテオケにいました。彼はそれまでは異邦人たちと一緒に食事をしていました。すでにカイザリヤで「神がきよめた物をきよくないと言ってならない」との幻に接して、異邦人もただ恵みによって救われることを知り、彼らと一緒に食事をする習慣を持っていました。ところがユダヤからの人々が来た時、ペテロは段々と異邦人との交わりから身を引いて行ったのです。それは割礼派のユダヤ人たちを恐れ、彼らのご機嫌を取るためでした。しかしこの行為は、異邦人はそのままでは十分な神の民ではない、今の状態では真に救われたとは言えないという印象を与えてしまいます。その態度は伝染して、何とあのバルナバまでもが同じ行動を取るようになってしまった。そこでパウロは皆の面前でペテロに向かって抗議をしました。またこのユダヤから来た人々は、パウロが伝道旅行をした町々にも出かけて行って、パウロの教えは間違いだ！救われるためには割礼が必要だ！これがエルサレム本部の教えだ！と主張したのです。それによって南ガラテヤ地方の人々は大いにかき乱されます。そこでパウロは彼らが先に受け入れた正しい福音から外れることがないように、ガラテヤ人への手紙を急いで書かなければなりませんでした。こう行った混乱の中で、使徒たちや長老たちと話し合うために、パウロとバルナバ、およびその仲間の幾人かがエルサレムに上ることとなります。そこで開かれた最初の教会会議が、このエルサレム会議だったのです。

ここに私たちが注目すべきいくつかのことがあります。まずその一つは、パウロとバルナバはこの問題を前にして、ただアンテオケ教会の問題としてだけ対処しようとはしなかったことです。これは全教会が依って立つ真理の根幹に関わることと見ました。そのため、エルサレム教会と一致していることがどうしても必要と捉えたのです。もしこのことをしないで、それぞれが独自に歩んだらどうなるでしょうか。キリスト教会はこの時点で二つに大分裂するところでした。割礼のない異邦人教会と、割礼のあるユダヤ人教会とに、です。そうなったら、一人のキリストをかしらとする一つの教会ではなくなってしまいます。そうならないように、全教会に関わる重要な真理を確認するために、このエルサレム会議が開かれたのです。

またこのために「会議」という方法が用いられたことも注目に値します。パウロまたはペテロが、それぞれ第一の使徒であることを主張して、正しい立場はこれだ！と宣言したのではありません。それぞれの教会から代表が派遣されて話し合う「会議」が開かれたのです。

しかし、この会議は単なる人間的な会議と違うことも心に留めるべきです。次回見る 28 節に「聖霊と私たちは」と出て来ます。すなわち教会会議は聖霊が主であって、人間が意見を戦わせて自分の意見を通す場ではありません。聖霊は何よりもイエス・キリストを指し示すお方です。ですから「聖霊と私たちは」と言えるためには、何よりもキリストの御心が確かめられなければなりません。そのためには、みことばが本当にそのことを言っているのか、という確認また確信が必要です。彼らはそのようにして主の権威に服し、主の御心を聖書に尋ね求める中で、聖霊の導きを得て行ったのです。私たちの教会の小会、中会、大会といったシステムはこれに倣うものです。会議を通してみことばに基づく全教会的な一致を求めるというものです。

さてパウロやバルナバは教会の人々に見送られて出発します。途中、フェニキヤとサマリヤを通る道々で異邦人宣教の様子を話すと、すべての兄弟たちに大きな喜びをもたらしたとあります。エルサレムに到着した時も、二人は異邦人宣教の様子を報告します。こちらでは喜びが起こったとは書かれていません。むしろ反対意見を持つ人たちが待ち構えていました。5 節：「しかし、パリサイ派の者で信者になった人々が立ち上がり、『異邦人にも割礼を受けさせ、また、モーセの律法を守ることを命じるべきである』と言った。」ここに激しい衝突が起こったのです。果たして異邦人は救われるために割礼を受け、律法を守り、ユダヤ人と同じようにならなければならないのか、それともただイエス・キリストを信じるだけで救われるのか。

会議の内容が 6 節以降にあります。まず「激しい論争があった」とあります。その後の三つの発言が特にここに書き留められています。最初はペテロの発言です。7〜9 節：「激しい論争があって後、ペテロが立ち上がって言った。『兄弟たち。ご存じのとおり、神は初めのころ、あなたがたの間で事をお決めになり、異邦人が私の口から福音のことばを聞いて信じるようにされたのです。そして、人の心の中を知っておられる神は、私たちに与えられたと同じように異邦人にも聖霊を与えて、彼らのためにあかしをし、私たちと彼らとに何の差別もつけず、彼らの心を信仰によってきよめてくださったのです。』」これは使徒の働き 10 章のカイザリヤにおけるコルネリオとの会見を指しています。ペテロがコルネリオとその家族に福音を語った時、彼らは信じました。そして神が彼らに聖霊を注がれました。まだ割礼を受けていない人たちなのに、です。その聖霊の注ぎはエルサレムにおけるペンテコステの出来事の再現と言えるようなことでした。ここに神ははっきりあかししているとペテロは言います。すなわち神はユダヤ人と異邦人に何の差別も付けておられないこと、彼らの心を信仰によってきよめてくださったのだということを、と。

10 節：「それなのに、なぜ、今あなたがたは、私たちの父祖たちも私たちも負いきれなかったくびきを、あの弟子たちの首に掛けて、神を試みようとするのです。」ペテロはここでユダヤ人にとっても律法は負いきれないくびきであったと言っています。これを完全に守って救いに到達することなどできない。それを異邦人たちの首に掛けて彼らに要求することは、神を試しているようなことである、と。

11 節：「私たちが主イエスの恵みによって救われたことを私たちは信じますが、あの人たちもそうなのです。」　ペテロはアンテオケでは信じていることとその振る舞いとの間にぶれが

生じてしまいましたが、あの経験を通して、今や福音をよりクリヤーに理解していたのでしょう。そしてこのように効果的にはっきり述べることができたのでしょう。

これを聞いて全会衆は沈黙してしまいます。神がなさったあかしの前に、誰も次の反対の言葉を言えなくなったのです。そこで次にバルナバとパウロが異邦人の間で神が行なわれたしるしと不思議について語ります。これはルカがこれまで記して来たことですので、詳しい内容は省略されていると考えられます。

そうして最後にヤコブが発言します。彼はイエス様の兄弟ヤコブで、エルサレム教会の牧師となっていた人です。おそらく彼がこの会議の議長をしていたのだろう、と多くの学者たちは言います。その彼がまずはペテロの言葉に触れます。14 節の「シメオン」とはシモンすなわちペテロのことです。神がどのように異邦人を顧みてくださったかはペテロが説明した通り、と述べます。その際、14 節には注目すべき言葉があります。それは「民」という言葉です。これはギリシャ語の「ラオス」で、神の民を指す特別な言葉です。すなわちヤコブはここで異邦人の信者もラオスと呼ばれる神の民の一員であると述べているのです。そして彼の発言の重要性は、聖書に根拠をしっかり確かめていることです。16 節以降でヤコブはアモス書 9 章の御言葉を引用します。そこで主は何と語っておられたか。主はそこで、倒れたダビデの幕屋を建て直すこと、そしてその新しい幕屋、すなわち神の教会には異邦人が含まれるようになると示しておられました。だからこのように異邦人が大量に教会に加えられる現象は、後から考えだされたことではない。神は終わりの日、メシヤの時代には、こういう日を来たらせると言っておられた。民族的なイスラエルという一国家に限定されず、異邦人にも広く門が開かれ、全世界にいるご自分の民を集める日が来ることを。この御言葉に照らしてヤコブは言います。「そこで、私の判断では、神に立ち返る異邦人を悩ませてはいけません。」　すなわち異邦人にユダヤ人方式の割礼を要求したり、律法遵守を要求するといった重荷を負わせるべきではないということです。そして 20〜21 節で 4 つの避けるべきことについて触れています。これについては次回の 28〜29 節に同じ内容が出て来ますので、そこで見たいと思います。こうしてヤコブのまとめの言葉が会議の決定となり、各教会へ告げられることになったのです。

以上の今日の箇所から、私たちが学ぶことは何でしょうか。まずその一つのことは、この教会会議を通して、信仰と生活に関する大切な事柄が確認・決定されて行ったことです。もしこの方法が取られず、それぞれの地区教会に問題の処理が任されたら、主の教会はバラバラに分裂するところでした。ユダヤ人教会と異邦人教会という全く性質の異なる二つの教会が存在するところでした。もしそうなったら、しばらくはそれぞれの地域でそれで良いとしても、少し長い目で見れば、どんなに取り返しのつかない混乱状態に陥ったことでしょうか。しかし当時のキリスト者たちは、お互いは主にあって一つの教会と信じていました。ですからただ一人の教会のかしらなる主の御心を確認し、そこに一致して歩むことを大切なことと考えて、このように主の導きを求めたのです。これによって教会は、この会議を開かなかったなら生じたであろう混乱からどれほど守られたことでしょうか。逆にその後の教会のために何と大きな基礎を築いたことでしょうか。これは御言葉のもとで主の御心を調べ、主の御心に服する教会会議を通して導かれて行ったことを私たちは心に留めたいと思います。

そしてこの会議で確認された事柄も私たちはしっかり心に刻みたいと思います。すなわちそれは「救いはただ主の恵みによる」ということです。私たちは救われるためにユダヤ人になる必要はありません。割礼を受ける必要も、ユダヤ人の儀式を守る必要もありません。私たちが

救われるために必要な全部のことを、ただキリストがしてくださいました。そのキリストに信頼し、キリストにより頼むだけで、救われるに十分なのです。これは言い換えれば、救われる条件としてこれに何かプラスしようとする考え方を私たちは排除しなければならないということです。いくらキリストがしてくださったことに感謝しても、それに何か人間のわざをプラスするなら、結局それは人間のわざにより頼む宗教となってしまいます。これは一方では救いを求める人を悩ませることであり、一方ではこれを満たしたと自負する人を高ぶらせ、誇らせるものです。しかし聖書は決してそのようには語っていません。

エルサレム会議が確認したこと、それは救いはただ主の恵みによるということです。主が私たちの救いに必要なことを全部成し遂げてくださった。その方に信頼するなら、世界中のどの国の人でも、どんな生まれの人でも、どんな身分の人でも、どんな罪人でも救いを頂き、聖霊を与えられ、心をきよめられ、天に入る者とさせて頂ける。この福音を私たちは改めて感謝し、この純粋な福音に生き続けることを喜びとしたい。エルサレム会議は主に導かれて、この尊い真理を確認し、はっきりと告白します。世々の教会はそのように純粋な福音を常に高く掲げ、これを明確に語り続ける者たちでなければならないのです。